

〔研究ノート〕

「下層社会論」の現在

——過去と現実をつなぐ意味論として——

小 倉 襄 二

I

一九八九年度の生活保護率が全人口の〇・九％（九‰）を割ることが厚生省統計で確認された。内訳としては八九年一月の速報では、全国で約百八万五千人、全人口の〇・八八％、保護世帯数にして六十五万、八八年に比較して、人数で七万四千人、世帯数にして二万四千の減少である。制度の違いがあるので比較は困難であるがヨーロッパ各国の公的扶助の受給率よりひとけた低くなつたと指摘されている。『ゆたかな社会』『貧困は過去のもの』という通念を証明する多くの指標の一つとしてこの事態をとらえることができる。かつての社会問題研究の中軸に位置をもっていた貧困論についての検証、検証がわが国の現実のなかでは激しい変

容に曝されていることと無関係ではない。福祉研究と社会問題の関連にとってもこの生活保護の被保護率の低下という推移に集中表現される状況はきわめて重い主題として考える必要がある。

貧しさの対極には豊かさがある。これからの貧困論については貧困自体の求心的な検証からいま日常性と通念のなかで私たちがどっぷり漬っているこの豊かさの社会状況のなかであらためて貧しさのかたちや意味を幅広い関係のなかで問うことに移りつつある。すでに一九七〇年代に英国のP・タウンゼントらの提示した deprivation の理論と実証の枠ぐみとして福祉国家状況のなかでの貧困研究の幅広い相対―相関概念がしめされている。ここには市民一般として当然に享受しうるゆたかな社会の所与の基準生活を剝奪され喪失している層、その状況から新しい貧困検証の可能

性を問いかけています。さいきんでは暉峻漱子著『豊かさとは何か』(岩波新書・一九八九年九月刊)、あるいは宇沢弘文著『豊かな社会』(の貧しさ)(岩波書店・一九八九年十二月刊)などの試みが新しい今日の貧困研究へのアプローチを拓いているといえよう。〈ゆとりをいけにえにした豊かさ〉(豊かなのか貧しいのか)〈貧しい労働の果実〉(暉峻)〈経済的「繁栄」と人間的貧困〉(水俣病は終わっていない)〈重税感とは何か〉(宇沢)これら項目にみられるように日常性のなかで実感する現実の意味するものを手がかりにゆたかさの虚像や虚偽を生活者としての市民の立場からこの段階の貧困を生々しく証明しようとする。これらの著作はゆたかさとその幻想に流されず、今日の時点でもくらしのいとなみと貧しさの意味を相関させる方法として有効といえよう。

いま、世紀末という歴史感覚がある。ここにはゆく末への予測とともにこの時点で辿りついた道程へのつよい関心が世紀末への共通の認識を形成しているように思える。吉田久一著『日本貧困史』(川島書店・一九八四年刊)は精緻な貧困の通史であるが、この世紀末という認識に焦点をあわせてみると一八九〇年代とのかさねあわせの問題がある。貧困史は社会問題史、あるいは社会問題史研究の主題であった。豊かさとは何かをいま問うなかで新しい貧しさの意味を逆証する方法は一方で歴史のなかであらためて貧困とは何かを問うことと深くむすびつく必然性がある。今日の理解のレヴェルは史的経過への研究と脈絡をもつことによつて解明される部分が多いと考えられる。私はこの過去と現実の脈絡

をむすびつけるコトバとして「下層社会」をあげたいと思う。下層社会といえは周知のように横山源之助による『日本之下層社会』が想起される。明治三十二年四月三十日の日付で東京・教文館より刊行された。印刷所は秀英社・本文三百四十五頁、付録五十三頁、定価六十銭であった。時に一八九九年である。本書は近代社会問題研究史の古典ともいふべきもので明治期における貧民研究、労働問題(職工問題)のみならずこの期における社会史研究にとつても必須の文献として定評がある。この著作自体、とくに私のいうコトバイメージ触発の表現としての「下層社会」についての関心がこの世紀末のかさねあわせのなかで再検討されようとしている。私はこの経過のなかに貧困論を今日に再構築する契機があると考えている。貧困論の地平がゆたかな社会(たとえば、中流化や生活保護率の低下など)のなかで自壊しているようにみえるがこの下層社会論の砕ぐみのなかであらためて視えてくるものを現実分析と結合することによつてわが国の貧困研究への展望を招く可能性への試論として考えてみたい。

II

「下層社会」の語感に明治、大正期の匂い、古風である。inferior rank of society の訳であるうか、たとえば、セピア色にくすんだ古いアルバムの写真の趣にもかようなものがある。戦後の貧困研究においては歴史上の引証や比喩的に使用されることはあつても「下層社会」を積極性のある概念として使用した例は無い。「下層

「下層社会論」の現在

社会論」としては大河内一男氏の「二つの下層社会」（一九五〇年二月）の論文が重要である。これは氏の編による『戦後社会の実態分析』（日本評論社・一九五〇年三月刊）に八序にかえて、として収載されたものである。大河内氏はあらためて横山源之助の『日本之下層社会』が描出しようとしたもの、十九世紀末の明治期日本、当時の思想界を支配した国粹主義、経済界におけるマシネスター主義のなかで貧労働者を貧民と同視、働く貧民をスクラップとも視るもの、支配層が「下層社会」をみる眼の中に存在していたことを指摘する。

こうした状況においては、恐らくこの横山源之助の著作は、『異端の書』であったにちがいないという。「下層社会」に対する温い情愛と、労働運動に対する灼くが如き熱誠とをもって筆をすすめ、やがて逼り来る、日本資本主義の巨大な映像に対して冷静に立ち向おうとしたのであるとも要約する。大河内一男氏がなぜ「二つの下層社会」という設定をしたかについてはまず「下層社会」の存在は、明治・大正・昭和の三代を通じて、重く、暗く、日本の社会生活の上ののしかかり、そして敗戦は、一時仮装されて表面から消え去ったかにみえた国民全体の生活上のさまざまな惨害を全面化したこと。マルクスが嘗て「産業予備軍」の特質として指摘した「窮乏・労働苦・奴隷状態・無知・凶暴・道德的墮落」は、そのまま敗戦後の日本の労働階級をいや「下層社会」化して了った労働者階級を性格づけるものであること、この意味で横山源之助の『日本之下層社会』は決して明治三十二年だけの問

題でなく、まさに昭和二十年八月以降のわれわれの問題であることなどが根拠となっている。横山源之助は、東京の貧民状態、職人社会、手工業、機械工場の職工生活、小作人生活事情について詳細に記録した。大河内一男氏編の本書は敗戦後の「下層社会」の実態として当時の最も戦闘的な労働組合の動向、半農半工の職工農家、寮舎生活、浮浪者、露店市場、特殊婦人とよばれた売春などについての調査記録となっている。これは単なる対比ではなくて敗戦によって蔽われていたものが全面的に顕在化した戦後「下層社会」の構造断面の分析の特性を意味した。浮浪化、ルンペン化、さらに戦後の荒涼たる情景のなかでの暴動、餓死につながる、たとえば本書での浮浪者の状況は、ほとんど全部が栄養失調、戦時浮腫六七％、結核四〇％、性病のはげしい蔓延、日雇労働者はこの層の上層部分、常習的犯罪人は彼等の下層部分を形成する。

ここで大河内一男氏があえて「下層社会」という表現を選択したのは、敗戦にともなう社会状況への判断があった。この戦後における発展性もなく明るい希望もない「下層社会」は、そのなかから新しい何ものも最早や生み出さないであろうという指摘、今日の「下層社会」は資本主義没落期に於ける「腐朽と頹廢と汚物」を代表するものであるとの断定などにしめされている。大河内論文は「下層社会」論としては一九五〇年前後における状況を映して独自の重要な発言といふべきである。

さきに天涯茫茫生、横山源之助の生きた十九世紀末とのかさね

あわせ—これはたんなる偶然ではなくて—「下層社会論」についての研究が一九八〇年代から九〇年代にかけて提起されることになった。たとえば「江戸学」と称されるアプローチによって幕藩制、江戸時代が内包した近代を醸成させる独特の制度、文化の諸般にわたる要素のプラス評価にはじまる研究の傾向やこの世紀末のゆきついた、ゆたかな社会が日々喪失しつつある陰翳にみちていた世界へのノスタルジー、世相史、風俗史、社会誌などの研究のいとなみの一環としての側面もある。

立花雄一著『明治下層記録文学』（創樹社・一九八二年四月刊）は、底辺ルボルタージュを通して明治二、三十年代、社会の最底辺に重層的に露出された矛盾、変革の相をとらえることへの要請に応えた領域として文学史の視野を中心にまとめられている。ここには、松原岩五郎の『最暗黒の東京』（国民新聞・明二五年十一月〜二六年八月断続連載、明治二六年・民友社刊・現代思潮社版（一九八〇年十一月刊）岩波文庫版（一九八八年五月刊）、おなじく松原の社会探訪記録『社会百方面』（明治三〇年・民友社刊）から横山源之助の『日本之下層社会』に到達する多彩な底辺ルボルタージュという領域設定での研究である。日本近代文学史においてこの分野は未開拓であり立花雄一氏のこの下層記録文学論は社会問題史、あるいは労働問題、運動史の研究枠で考究されてきた「下層社会論」に幅広い関連分野を開拓するものとしてすぐれた見識をしめしている。内容としては「浮雲」の作家二葉亭四迷に底辺ルポの淵源としての位置づけと横山源之助のかかわり、国

「下層社会論」の現在

木田独歩、田岡嶺雲、樋口一葉、木下尚江、内田魯庵、など周辺
の文学者との扱いが興味ぶかい。立花氏は横山源之助の『日本之下層社会』が桜田文吾の『貧天地飢寒窟探険記』（明治二十六年八月以降、「日本」新聞連載）や田岡嶺雲の著作にはじまる底辺ルポの性格をもっともあらわにしたものであって、三つの側面—経世経綸的（政治的）側面、社会科学的（科学的）側面と文学的側面とを同時にあわせもって、この三側面は併存しつつ反撥、矛盾するものとしてとらえられている。この未分化な混在が一れんの底辺ルボルタージュの魅力ともなっている。二葉亭四迷と文学、社会批評、その継承として松原岩五郎、横山源之助を位置づけ、明治二十年以降の文学主流の硯友社系などにとられない自由な領域、社会と文学とのいきいきした関係とかたちの創出とする論点も重要である。

さらに立花氏によって『下層社会探訪集』（現代教養文庫・社会思想社・一九九〇年六月刊）が編集されている。本書は横山源之助の主著『日本之下層社会』成立前後の作品群を収録している。主として「国民之友」「実業時論」や「毎日新聞」の記事であって横山の思考や多岐にわたる関心事がよみとることができ。戦争と地方労働者、木賃宿見聞記、地方の下層社会、人力車夫、職人談、戦争と労働社会など当時の下層社会研究についての資料としても重要なものである。立花雄一氏は本書の解説のなかで、「：したがって貧困問題ははやらない。：九〇以上の日本国民は中流意識をだきつつ、毎朝椅子もない殺人電車にたがいに乗り

「下層社会論」の現在

合せているのである。われわれが日本人がなになであったか、なにであるべきか、つねに問いつづけるべきであらう。われわれは高度経済成長期にはいるその日本で横山源之助が明治期にえがいたその「庶民たち」をまぎれもなく生きていたのである。」と私のいうかさねあわせの意味を語っている。

III

一九八九年に入って西田長壽氏の『日本ジャーナリズム史研究』（みすず書房・一九八九年十一月刊）が発刊された。本書は一部明治初期新聞発達史概説、「東洋自由新聞」、筆禍に現われた大小新聞の性質、明治初期雑誌についてなど、第二部に明治前期政党関係新聞紙経営史料集、さらに第三部が「下層社会論」であった。明治初期の買突政策、『日本之下層社会』の成立をはじめとする横山源之助らについての論稿が収載されている。さきに西田長壽氏は編著として『都市下層社会』（生活社・一九四九年刊）において鈴木梅四郎の『大阪名護町貧民窟視察記』と桜田文吾や松原岩五郎の『底辺ルポ』をあつめて出版している。この世紀末にあらためて西田長壽氏の発想の原点ともいわれる下層社会論が問われることもたんなるばくぜんたる問題意識の浮上とはとうてい考えられない。

さらに紀田順一郎著の『東京の下層社会』（新潮社・一九九〇年五月刊）が出版された。本書は、明治から終戦までという副題があり、「新潮」45に昭和六十三年九月号より平成元年三月号に

わたって連載されたものを一本にまとめたものである。最暗黒の東京探訪、東京残飯地帯ルポ、流民の都市、帝都魔窟物語などの項目をみても、松原岩五郎、桜田文吾らの著作の紹介と紀田順一郎氏の『近代化の影に置き忘れられた人々』という主題からの著作は、現在本書にみられるような極貧の生活が「なくなつた」という意味の追究、第二に都市の住環境という主題、本書のテーマの問題、それ自体は過去のものに相違ないが、過密な環境の下で住民意識の乏しい環境が急速に荒廃するという視点から、現在、近未来の東京問題にだぶつてくるこの二点をあげている。

さらに中川清著の『日本の都市下層』（勁草書房・一九八五年刊）、草間八十雄、磯村英一監修『近代下層民衆生活誌』（明石書店・一九八七年刊）など一応、「下層生活」「下層社会」という表題での著作がこの期に相ついで公刊されている。さきに触れた『ゆたかな社会』の状況、そのゆきつく果に視えてきたもの、たんなる懐古ではなくてくらしのゆらぎと喪失感、不安のなかで陣峻淑子氏のいう『豊かさとは何か』を凝視する問いかけへの一つの視座としてこれらの「下層社会論」の現在があるのではないか。これらの著作は、もともと入手困難な原資料を駆使してそれぞれ著者の独自の主題設定や検証を行っているが、いま、なぜ、「下層社会論」かについての時代と状況への共通の思考がみえるようだ。そして人間のくらしとは、貧しきやゆたかさとは人々の絆の在り方、あるいは自由といった主題に到達するかも知れない。ある社会評論家は『怠ける権利』というコトバを使った。横山の描い

た陋俗の「日稼人足」は失対日雇労働者や自由労働者と推移していった。いま、フランスから留学の研究者アンヌ・ゴノンさんと京都千本労働出張所で面接した日雇労働者たちはある種のドロップ・アウトした鬱屈した心情とともに管理されることからの自由の気易さ、自由に働くことの意味の自己主張を語ることが多かった。その他、さまざまな生活上のトラブル、悲惨も、高齢化社会の展開をベースとして不断に生起し、累積している。生活保護率が九パーミリの割ったという明暗と新しい貧困の諸相の拡張とは無関係ではない。

「下層社会」という設定へのこだわりは、たんに表現の問題にとどまらず研究「アプローチ」の方法と相關しているのではないが、さきにあげた中川清氏の労作『日本の都市下層』のなかにもこの方法についての言及がある。本書は都市下層への視角の項目のなかで「都市下層は、絶えず保護と指導の対象となりながらも、生活の在り方の変化に際して、あるべき生活様式から最も自由な存在であった」という重要な指摘がある。「下層社会」の把握の評価としては、さきに紹介した大河内一男氏の所説、さらに労働市場論を背景とする論証の紹介がある。とくに隅谷三喜男氏の『日本の労働問題』（一九六七年）において「小工業や零細家内工業の労働者、小売商、サービス業の従業者、職人等の手伝、土建その他の人足、日雇等々、近代的賃労働関係とは異なる家長制や擬似的親分子分等に支配された生業に就くものを「雑業層」と定義し、この「雑業層」が労働市場において、過剰人口の

「下層社会論」の現在

貯水池と追加賃労働者の給源という役割を担ったことの指摘がある。中川清氏はたとえほかうした層における多就業家計がいかなるものであったかが不問のまゝであること、その具体的様相の考究を本書の解明の主題とされたようである。とくに「下層社会」が、そうであってはならないもの、そこから脱却すべきものと捉えられ、現にそうであるもの、その中で生活するものの在り方としての把握の不在も指摘されている。さらに「下層社会」の固定の把握のために「下層社会」はとくに都市地域を構成する不可欠の階層という積極的位置づけを獲得することができなかったことも考察されている。中川清氏は日本の近代の歴史が成し遂げたのは「下層社会」から「中流社会」への大規模な底上げに外ならなかったこと。ここでいう都市下層とはこの過程でとりのこされたとみなされてきた人々であり、その人々の生活そのものの在り方の変化とその過程とは一体何だったのかを振り返ることもある。あえて「社会」という文字を重ねなかつたのもこの研究を通してわれわれ自身の生活の在り方の源流を近代の都市生活の確かな変化として迎える作業のゆえと主張する。精緻な資料の検証と再構成によって、明治中後期、日露戦争、第一次大戦、関東大震災、昭和恐慌期、戦前の都市下層の総括、近代日本の都市生活などの時期区分によってさきの意図が検証されている。この論証には生活構造の把握を通して現在の認識「過去と現在を意味論としてかさねあわせる方法の可能性を拓くもの」といえるのではないか。

「下層社会」の現在についての私の「仮説」としては、第三の

「下層社会論」の現在

下層社会の形成といえる状況がある。生活の挫折の要因は多岐にわたる。こうした層の沈滞と散乱がある。過疎、産炭地の荒廃、被差別部落、障害児者、とくに高齢化にもなうきびしさ、父子、母子問題など家族の絆の分断、非行の結末、傷病と生活破壊、交通事故の後遺症、公害、住環境の劣化、こうした関連の枠ぐみでみると過去と現在のつなぎ―経過のなかであきらかに、第三の下層社会と規定することの可能な状況が広く深く存在し、変動しつつある。さきの暉峻氏や宇沢氏の著作の指摘、その方法論の視野でとらえられた局面でもある。壮麗さ、ゆたかさの真只中に拡がる事態であって生活の総体として考察を要する主題であらう。

さらに歴史―過去と現在をつないでこの「下層社会」の現在のなかに方法論、アプローチの在り方をふくめてこの主題に迫る重要な部分があると考えられないか。

私という『仮説』第三の下層社会の今日の特性には、さらに外国人労働者、ベトナム難民在日韓国朝鮮人問題などもその構成層として考察すべきであらう。アジアのスラムについての研究紹介も注目されており、わが国のゆたかさと人手不足、底辺労働のかかわりのなかに異文化を扱った人々、民族、人種差別の要素も重視すべきである。

公的扶助研究のさいきんのセミナーでもベトナム家族の被保護世帯についての処遇上の隘路・困難が指摘されている。こうした状況には、それぞれの概念規定がなされているが、過去を現在とつなぐ社会問題史の視点からはこの「下層社会論」の提示のな

かで扱うことの必然性があるのではないか。

いまこの「下層社会論」の脈路を総体としてとらえる枠ぐみ、論証は充分ではないので短絡した結論は避けるべきである。しかし歴史―過去と現在にその意味するものを結ぶこと。これからの下層社会論研究と現実検証のなかに、たとえばさきの現代の貧困論の領域についての説得力のある接近、説明のための方法論をふくめてのキイ・ポイントがここに述べた設定に内包されていると考えられないか。私は下層社会論の現在をこのように視たいと思

(1990.10.2)

―この日、『釜ヶ崎騒乱』の報あり―